

令和5年度

第3回

静岡県立高等学校の在り方に関する  
基本計画策定委員会

議事録

令和6年2月15日（木）

- 1 開催日時 令和6年2月15日(木) 午前10時から12時まで
- 2 開催場所 県庁別館9階特別第二会議室
- 3 議 事 静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画(案)の協議 ほか
- 4 出席者 委員長 村 山 功  
副委員長 永田奈央美  
委 員 河合多真美  
委 員 川口有美子  
委 員 寺 島 明 彦  
委 員 三 輪 高 太 郎  
(オブザーバー) 井ノ上 美津恵  
(オブザーバー) 中村美智太郎  
(オブザーバー) 堀 井 啓 幸  
(エキスパートオブザーバー) 田 中 一 也

事務局： それでは、定刻になりましたので、ただいまから第3回静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会を開会いたします。  
本日は、委員全員の御出席をいただいております。  
また、本日はオブザーバーとして、常葉大学、堀井様、静岡大学、中村様、浜松NPOネットワーク代表理事の井ノ上様、そしてエキストラオブザーバーのNTT西日本、田中様にオンラインで御参加をいただいております。ありがとうございます。  
それでは、開会に当たりまして、池上教育長より御挨拶申し上げます。

池上教育長： 皆様、おはようございます。  
本日は、御多忙中にもかかわらず、当委員会に御出席を賜りまして誠にありがとうございます。  
昨年度、県立高等学校の在り方検討委員会ということで議論を進めてまいりました。そして、今年度、県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会に体制を改めて、これまで様々な協議を重ねていただきました。この委員会も、本日が最終回になります。  
今年度も4月に策定した基本方針に基づいて、より具体的な方向性、また取組について大変深く丁寧に御議論をいただきました。村山委員長、永田副委員長をはじめ、これまで会議に関わってくださった全ての委員の皆様及び本日はウェブ参加のオブザーバーの皆様にも心より御礼を申し上げます。

さて、本日は基本計画の策定に向けた最終段階として、11月に委員の皆様からいただいた御意見、また12月から1月にかけて実施したパブリックコメントの意見等を取りまとめて、基本計画（案）の内容を確認していきたいと考えております。

後ほど資料でも御紹介することになりますが、パブリックコメントでは、20名から100件を超えるコメントがありました。しかも、非常に丁寧に中身を読んでいただいた上でのコメントで、この点についても、私ども感謝しておると同時に、それだけ皆さんの熱いまなざしの中にこの基本計画がスタートするのだということで、身の引き締まる思いでございます。

また、次年度以降、この基本計画を実際に進めていくに当たって、記載された方向性や取組の具現化に向けた実践的な方策、またアプローチ等について、委員及びオブザーバーの皆様から御意見等をいただく機会もあろうかと存じます。そういった段階になりましても、引き続き御指導をお願いしたいと思います。

本日は、このメンバーで集まる最後の委員会となりますが、将来を見据えた県立高等学校の在り方について、皆様のお考えを御教授いただくとともに、誰一人取り残さない教育の実現に向けて、忌憚のない御意見を賜ればと存じております。

昨日、次年度の当初予算が公表されまして、地元の新聞においても教育のことが第一に大きく取り上げられておりました。それだけ社会的な関心の高さを改めて感じているところであります。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

事務局： ありがとうございます。  
それでは、これからの議事進行は村山委員長にお願いします。

村山委員長： 皆様、おはようございます。  
今日もよろしく願いいたします。  
それでは、お手元の次第に従って、本日の議事を進行させていただきます。

本日ですけれども、協議事項等の(1)のところに、静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画（案）ということで、オンライン意見聴取及びパブリックコメントに関する対応状況について、このことについて議論するというのと、それからこれである意味報告書としては完成という形になりますけれども、今度は、その後それを来年度以降実行していきますので、その際にどのように具現化していったらよいかということについて、委員及びオブザーバーの皆様から御意見をいただきたいと思っています。最後に、この2年間にわたる協議が今回最終回となりますので、お時間をいただいて、委員の皆様、それからオブザーバーの皆様から、これまでを振り返っていただいて、感想や

コメントがありましたらいただきたいと考えています。よろしく願  
いします。

そうしましたら、まず第1部の内容について、事務局から説明をお  
願いします。

事務局： 高校教育課長、中山です。本日はよろしくお願いいたします。

それでは、着座にて資料の説明をさせていただきます。

本日、お手元にお配りしております資料は資料1から資料4、それ  
から参考資料の1、2とございます。主に資料1、2の説明をしてま  
いりたいと考えております。まずは1ページ、資料1を御覧ください。

こちらにつきましては、基本計画の全体的な概要を示した資料とな  
っております。改めて御紹介させていただきます。

今回、様々な状況の変化を踏まえまして、今年度中に基本計画を策  
定するという事で、委員の皆様からの御意見をいただきながら、こ  
こまで進めてきたところでございます。

基本的に、計画の期間については、2028年度までの5年間を想定し  
ており、基本理念につきましては県で掲げました「有徳の人」の育成  
～誰一人取り残さない教育の実現～、これを実現するというところを  
掲げております。

基本計画の概要の(3)番のところでございますが、本県の高校を取  
り巻く現状と課題ということで、主に4点掲げさせていただいており  
ます。社会に求められる人材像が変化しているということ、人口や生  
徒数が非常に減少しているということ、それから生徒一人一人の背景  
や特性が多様化しているということ、そして教員の資質の向上である  
とか、多忙化への対応が必要であるということ。こちらの4項目につ  
きまして、現状と課題で御説明をさせていただきます。

こうした現状、課題等を踏まえまして、高等学校に特に求められる  
役割として強調したいのが、高校卒業時に必要な資質・能力の育成や  
探究的な学び等を通じた創造力の育成であるとか、人口減少が進む中  
において、地域との連携・協働によって地域づくりに貢献できる人材  
の育成であるとか、様々な困難を抱える生徒の実態に即した学びのセ  
ーフティーネットであるとか、それを取り巻く多様な教育の実現に向  
けては、教員の資質・能力の向上、または働き方改革の推進が不可欠  
であるとか、こういった辺りがポイントとして上げられます。

こうした方向、現状、課題、役割等を踏まえまして、5番のところに  
目指す方向性として3点掲げさせていただきます。

1つ目が、まず生徒の視点、学びの変革というところでは、未来を  
創る主体的な学び、また一人一人の個性が輝く学びを実現していく。  
そのために、具体的な主な視点としては、探究的な学びなど主体性を  
育む学びの実践であるとか、生徒が主体的に高校を選択できるような

体制づくりであるとか、魅力・特色ある学科や学校の設置ということ。それから、生徒の多様な個性を伸ばす学び、セーフティネットも含めてそういったものを実践していくということ。それから、学力に偏らない多様な評価事項を検討していくということがございます。

続きまして、現在、学校の存立に不可欠になっている地域との実践、地域との連携ということで、地域の視点ということで地域（実社会）と共にある学校を掲げております。地域との継続的な連携・支援を進めていくとともに、地域が学校を支える体制づくりを共に進めていこうということでここに記載させていただいております。

3つ目は、それを支える教育基盤の確立ということで教育基盤の視点となっておりますが、主な視点のところがございますけれども、効率的で教育効果の高い基盤整備が求められる一方、過疎・中山間地を含めまして、公教育としての学びの保障が必要であるというようなことを記載させていただいております。

これを踏まえまして、2ページのところがございますけれども、主な取組、これは全体的にかなりボリュームがありますが、その中で抜粋したものをここに掲げております。

その前に、この主な取組の前提としましては、第三次長期計画の策定以後に生じた新たな課題への対応、また発展的な取組が必要な事項に対して今回まとめたものでございます。これを中心に、これからの学校づくりに必要な基本的な考え方や具体的な方向性を示し、そして第三次長期計画中に記載しておりました高等学校の改編（再編整備）につきましては、今現在各地域で地域協議会を開催しております。この地域協議会で地域ごとのグランドデザインを策定いたしまして、その地域の意見も踏まえながら、今後、県教育委員会が具体的な方針を決定してまいりたいと考えております。

取組につきましては、ここに記載のとおり、まず①番「生徒の視点」、②番「地域の視点」、③番「教育基盤の視点」ということで、先ほど申し上げた目指す方向性の3つの視点に沿って取組を整理してございます。

例えば、共通のところになりますけれども、今回予算でも出ておりますが、ICTを活用した学校間連携や遠隔授業配信センター、特に習熟度別学習など、専門的な学習が必要な中山間地・小規模校に対する一括して授業を配信する遠隔授業配信センターの設置であるとか、またAI、メタバース、その他XRなどの最新技術の導入、また地域、生徒の実態やニーズを踏まえた新たな学科・コース等の検討、また探究的な学びなど生徒の興味関心を深める学びの展開、さらに大学との連携といったものを記載しております。

こういった取組を様々なカテゴリー別に記載しておりますが、③番の「教育基盤」の適正規模・適正配置のところポイントとなりますのが、アスタリスクの印で2つ付けてあります。適正規模と適正配置

の考え方について、学校の規模は1学年の定員が240名から320名を基本としつつも、実学系の学校など地域における教育の多様な選択肢を確保するための学校、教育空白域を回避するための学校については、地域バランスを踏まえて設置に配慮していくと。こういった2つの、言わば対立する要件につきましてバランスを取って、最適な在り方を検討していく。そのために、少し上に記載してありますが、②番「地域との連携」のところにあります地域協議会において地域の御意見をいただき、グランドデザインを作成していくことを考えております。

今後のスケジュールにつきましては、本日の策定委員会の意見で最終案として取りまとめいただいた後、今後、内部的な協議、それから県議会での協議、それから教育委員会定例会での協議といったところがまだ段階としてございます。こういったものを踏まえまして、最終的には3月末に最終版を公表してまいりたいと考えております。

続きまして、3ページ、資料2を御覧ください。

こちらにつきましては、11月29日の時点で、基本計画案の考え方について、委員の皆様からオンラインで意見をいただいております。これを踏まえて、11月29日時点のものから変更している箇所、それから先ほど教育長のお話にもございましたが、昨年末から今年初めにかけて実施したパブリックコメントで20人から102件の意見をいただきまして、これを踏まえた修正箇所がございます。

この資料2につきましては、その意見が大きくどのようなものであったかということについての御説明をさせていただきます。

まず策定委員会での意見というところですが、大きく分けて3つほどのカテゴリーで整理をしております。

1つ目が、「静岡県ならではの」の表現、アピール、他県の計画と差別化するというところで、「静岡県ならではの」というところ、特に県民の皆様に対してどういった課題を訴えたいか、そこを明確化すべきであるというような御意見をいただきました。

様々な修正がございましたが、例えば資料4をお開きいただければと思います。資料4の11ページから13ページ、こちらを並行して御覧ください。

黄色の箇所については、11月29日以降変更した点を示しており、この辺りは黄色の箇所が物すごく多くなっています。

全国的な状況に加えて静岡県の現在の状況に関して記載し、それに関する考え方、課題の整理をここでを行い、11ページから13ページにかけてかなり加筆をさせていただいたところがございます。特に12ページにつきましては、人口減少が非常に著しいということで、今後様々な地域との連携であるとか、高校の役割の方向性を示していく必要があると。特に、「2人口・生徒数の減少」のセクションの一番下の3行のところがございますが、本県において今後想定され得る生徒数・教員数の減に対しては、多様な地域産業などが根づく地域性を踏まえ

まして、地域と連携した教育活動や探究的な学び、こういったものが特に重要になってくるだろうという文章を入れさせていただいております。

資料2にお戻りいただきますと、こうした内容が、最初の四角のところに、「地域産業が根づく本県の特徴を踏まえた取組の重要性」ということで書かせていただいております。

その他、県外流出に関するグラフであるとか、教育委員会が地域バランスを考えた学科配置に取り組んでいくことをアピールするといった意見に対応しまして、表の右にあるような対応をさせていただいているということでございます。

2つ目です。「B」のところです。学びの在り方の見直しということで、これも様々な意見がございました。時代の変化を踏まえて、学びの在り方を見直すべき視点の追加ということで、例えば「探究的な学び」を「文理横断的な探究的な学び」というとしてはどうかとか、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）について、理系の女性の割合が高まっていないというところについての記載であるとか、こういったところを追加させていただきました。様々なそういった修正をさせていただいたというところが「B」でございます。

「C」につきまして、4ページでございますけれども、教員の働き方を支える体制整備ということで、こちらはパブリックコメントとも共通しているところですが、教育を支える教員についての働きやすい環境整備をするためのポイントを強調すべきということで、教員志望者の減少、またはBYOD、パソコンですね、そうしたICTの推進についての役割分担であるとかそういったもの、あとは勤務時間などの環境整備、ワーク・ライフ・バランスの視点などとそういった御意見をいただきましたので、こちらにつきましてもそれに対応するような記載を加筆させていただいたところでございます。

続きまして、2のパブリックコメント、4ページの下からでございますけれども、意見聴取は先ほど申し上げましたとおり、年末から年初めにかけて、20人から102件の意見をいただいたところでございます。これも大きく分けて、3つほどのカテゴリーに整理させていただきました。

意見の傾向としまして、まず1つ目です。今回つくった計画案と国の考え方、これが矛盾していないというか、対応関係を明らかにすべきではないかという御意見をいただき、その様々なポイントを御指摘いただきましたことから、特に理念の部分について、そういったところの加筆をさせていただいたということがございます。

続きまして、2つ目では、「県立高等学校に求められる役割」の整理について様々な意見をいただきました。県立高校の地域社会の中での目指すべき役割であるとか、それから特にセーフティーネットの話、定時制・通信制だけではなく、様々な困難を抱えている生徒を支

えるという段階での支援体制も強調すべきという御意見をいただきましたので、主に前段の部分にそういったところの視点を記載させていただいたということでございます。

そして、3つ目は、教員不足の解消と働き方改革ということで、これは専門委員会の意見とも項目としては重複しておりますけれども、優れた人材の確保ということを踏まえて、教員の在り方、働き方の見直しに対しての具体的な取組を記載すべきだということで様々な御意見をいただきました。状況分析のところにも記載させていただきましたが、その他にはICTの活用であるとか、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた取組であるとか、そういったところを記載させていただいております。

ここら辺が、パブリックコメントと策定委員会の意見を踏まえた修正点を整理したものでございます。それを踏まえまして、資料3ですけれども、基本計画、大部な資料の内容になっておりますので、それを概要として示したものの、これも以前にお示しさせていただきましたけれども、これも修正した箇所に黄色マーカーをつけているというところがございます。説明が重複しますので、詳しくは説明いたしません。これを見ていただきますと、どの辺が変わったかというところがある程度分かるかと思えます。

特に前段の理念の部分、それから1枚開いていただきまして、2ページの部分、特に共通の取組の辺り。それから、しばらく修正箇所はあまりなく、最後の6ページ、教員の在り方の部分、この辺に意見が多く、修正が加わっているということが御確認いただけるかと思えます。

そして、それを踏まえまして、資料4は基本計画の本体についてでございます。こちらにつきましても、修正した部分については黄色のマーカーをつけておりますので、御確認ください。

特に、前段のところ、3ページ辺りから始まりまして、先ほど申し上げた11ページから13ページの辺りの課題の部分、それからそれを踏まえた14ページ、15ページの今後の在り方の部分、この辺についての修正がかなり入っているということでございます。

18ページや19ページにつきましては、地域産業に関する話ということで、高校卒業後の県外の流出の状況、県外企業への就職率などとか、そういったところについてのデータを書かせていただいたり、19ページの下のところには、県立高校の主な学科がバランスよく配置されているという辺りについてのデータを記載させていただいたりなどしております。

それから、20ページ、21ページにつきましては、先ほど申し上げた国の方針との方向性などということが記載されております。

それから、21ページには、先ほど少し申し上げましたが、上の辺り、5行目辺り、遠隔授業配信センターの機能の設置というようなこ



とが記載されています。

以下、そういったところで24ページぐらいまで修正箇所が続き、その後しばらく細かい修正が続き、47ページから49ページの辺り、教員の働き方改革というところで、ICTであるとか、ワーク・ライフ・バランスといった辺りの修正点を加えているところがございます。

大きく申し上げまして、基本計画の内容を改めて確認いただきましたのと、その基本計画についてのパブリックコメント等を踏まえた修正点についての説明をさせていただきました。私からの説明は以上になります。

あと、参考資料1、2につきましては、資料2で説明しましたオンライン会議後の意見、オンライン会議における意見とパブリックコメントの意見をそのままの意見要旨及び対応案について、お付けしておりますので、参考として御確認いただければと思います。説明は以上です。よろしく願いいたします。

村山委員長： 説明ありがとうございました。

以上のような経緯を踏まえて、今回のこの案になっています。これについて、皆様から御意見ありましたらよろしく願いいたします。

昨年のオンラインでの皆様からの御意見、それからパブリックコメント等々、5年前の長期計画から大きく変わったところについてかなりコメントをいただいているように思います。

それでは、私から話をさせていただきますが、会議の中で、いつも「静岡県らしさ」ということが議論になって、なかなかこれが何かというのが難しかったわけですが、静岡県の場合、地域産業というには結構グローバルな企業だったりもするわけですが、そういったものと学校との関係をうまくつないでいくことによって、子どもたちの学びを少しでも発展的なものにしていきたいという気持ちがありましたが、今回、これがすごく出ている報告書になったのではないかと思っています。

あと、パブリックコメントの中で、高校の役割が何かということがはっきり示されていないのではないかと御意見がありましたけれども、今高校が単独で子どもたちと向き合っているわけではないので、例えばセーフティーネットという役割でも、高校もそういう役割を果たす一方で、まだ別の外部の組織も同じような形で子どもたちのセーフティーネットになっているという、そうした形で、高校が単独で仕事をするので、高校の役割はこれですとは言えない状況になっています。子どもたちも多様で、高校もいろいろ多様になってきており、その中でこれを大事にしようということは一応押さえてあって、その上でそれだけをやるという意味ではなくて、いろんな役割を果たしていきますよという趣旨も、この中にきちんと含まれたのではないかなと思っています。

ほかに何かありましたら、よろしくお願いたします。

では、ちょっと指名させていただいてもよろしいですか。

今回のパブリックコメントを中心に、教員の働き方改革に関する話について随分御意見をいただいております、それに合わせて修正されている部分がありますが、これについて寺島委員はどのようにお考えか教えてください。

寺 島 委 員：      ありがとうございます。

パブリックコメントでも、本当に多くの建設的な御意見が県民の皆様から寄せられまして、それに事務局のほうも対応していただくのは本当に大変だったと思います。丁寧に対応していただいたところが、この資料の中からも本当によく見えますので、お礼を申し上げたいと思います。

実際に今、学校の働き方改革のところでは、ICT化、それからAIを利用した、例えば自動採点のシステムなどが学校に入りつつあります。それによって、例えば試験の採点時間、負担感がほぼ半分ぐらいになっています。例えば、今まで2日かけて採点していたものがほぼ1日で終わるとか、8時間だったものが4時間になるなど、導入が進んでいる学校があります。ただ、全ての学校でそれが入っているわけではないものですから、また教育委員会でもいろいろなところで御配慮もいただいているということも承知をしておりますけれども、全校でこれを活用できるようになっていけば、先生方の負担というのはかなり軽くなっていくと思います。それはありがたいと思っています。

とはいえ実は、校長同士のネットワークの中で、ちょうど今の時期、令和6年度の非常勤講師を探すのに各学校が本当に困っています。人が今いなくなってきていまして、そして授業にはどうしても人が必要なものですから、そここのところでどうしようというメールがっぱい上がってきています。そのうちの幾つかは、おかげさまでということにはなっているのですが、これからちょっと各学校の校長は胃が痛い状況が続いてまいります。それから、教務がこれからカリキュラム編成をしていくのに本当に大変な状況になっています。

その中で、例えば男性の育児休業というようなところで、教育委員会からも本当に後押しをしていただけて、男性もそれから女性も休めるような制度をつくっていただきましたが、人がいないのです。どうしてもその人を探すので困っているというようなことがあるものですから、そこは何とかならないかなということを考えておりますが、それがかなっていきましたら、先ほどの重要な次の課題になります、学校現場を支えてくださる新しい人材の確保、魅力的な勤務場所としての学校というのも出来上がってくるのかなと思っています。

村山委員長： ありがとうございます。

具体的な部分については、第2部のほうでまた御意見をいただければと思います。

そうしましたら、今度は三輪委員ですけれども、議論の中で高校生の出口の話をされていたと思いますが、高校を出てからすぐに大学に進むという選択肢以外にも働いてから学ぶなど、いろいろな道筋があるということをもう少し出したほうがよいのではないかとといった話は何度か御意見でいただいたと思うのですが、そのことについては、今回のこの案についてはどのようにお考えでしょうか。

三輪委員： そうですね、高校生が静岡県から出ていってしまうというのが一番の課題だと思っています。先日も全国の高P連の会合があって、いろいろな県の人たちと話をしましたが、卒業後に生徒は出ていってしまうということはみんな一緒です。それに対する具体案もなく難しいのですが、全国の高P連の会合では、2年に1回、最新の高校生の意識調査と保護者の意識調査を実施しており、ちょうど去年そのアンケート調査を実施し、結果が少しずつ上がってきています。本県からも3つの公立高校さんに参加していただいて、アンケート結果がまとまりつつあって、もうすぐ各高校と全国高P連のホームページに調査結果が載ってくると思います。私の子はもう高校生から大学生と社会人になっており、今の高校生と感覚が少し違ってくるものですから、そういった最新の保護者と高校生の感覚は多分全然違っていると思います。先ほど学校の先生がいらっしゃらないとありましたが、私の子どもの同級生とかで、学校の先生、教職を目指しているという話を全く聞きません。ただ、大学の研究者として残るという話がありますが、学校の先生になるという話が非常に少なく、僕らの時代ってもっと先生がいましたが、そこら辺も変わってきているので、我々としてこうあってほしい、静岡県としてはこうあってほしいという姿は多分あると思いますが、今の若者がそれを酌み取ってくれるかという、そこら辺のギャップというのが結構大きいのかなというのは感じております。

村山委員長： ありがとうございます。

高校生に酌み取ってもらうというのでは申し訳ないので、我々が何とかしなければいけないとは思いますが。

そうしましたら、川口委員も特に静岡県ということについて御発言をいろいろいただきましたけれども、今回のこの報告書についてはいかがでしょうか。

川口委員： 今の三輪委員のお話に続く話かと思いますが、例えばこの19ページに載せていただいた県外企業への就職に関するグラフは、本当に静岡

県らしいというか、静岡県がある意味誇るべき内容だと思います。これは、例えば令和4年については、9%の人たちが県外就職したということは、91%の人たちは県内に就職したということ、そういう読み取りでいいですね。

事務局： 高校卒業者の数値です。

川口委員： つまり91%の生徒さんは県内に勤めているという表ですね。本当にこれはすばらしいことだし、県外の者から見たら本当羨ましいグラフです。

実は、事務的なことを申し上げますと、この県外企業へ就職のグラフについてというか、これはもうちょっと丁寧に書いたほうがよりアピールになると思います。流出のほうばかり文言として書かれているので、1文、2文、このページに足していただいて、91%と書くのか、9%は県外に出ていると書くのかはお任せしますが、それだけ静岡県内にはたくさんの産業がまだ元気であると。

前回だったと思いますけれども、本当に私のいる鳥取県のほうでは、18歳でみんな特に関西圏を中心に出ていきます。出て行って、そのまま帰ってこないで、どんどん人口が減る一方だと。産業界、経済界の人たちもすごく危機感を持っている。そういった意味で、本当に静岡県のこの実態は、私は羨ましいので、もっとアピールされたらよいと思います。

それから、今寺島委員がお話ししてくださった、大分先生方の業務のやり方もICTの推進とともに、やり方が変わっている。実はそれがあまり伝わってこないのです。先生たちの働き方を改革しなければというのは伝わってきていますが、実際には先ほどのシステムが入って、採点の時間が大分減りましたといった話はなかなか一般の人たちには伝わってこないで、そうすると私たちって今まで見てきた分では判断ができないので、先生って忙しそうだった、自分がお世話になった先生も夜中まで仕事をしていたみたいなイメージで、それなら教師になるのはやめようかなみたいに思ってしまうので、今そうした実態が変わっている、仕事の仕方が変わっている、昔とは違っているということも一方でアピールしていかないと、一般の方たち、あるいはそういう若い人たちのイメージレベルからなかなか変わらないと思うので、変わっているところをきちんと行っていくことも大事なのかなと思いました。以上です。

村山委員長： ありがとうございます。

そうしましたら、県内外の話とか、就職のことを含めて、企業側のほうの御意見を河合委員からいただきたいと思います。

河合委員： 河合です。

こんなにたくさんの資料を取りまとめていただいて、事務局の皆様  
に本当に感謝申し上げます。

パブリックコメントについても、私は日頃あまりこういうことを目  
にする機会がなかったので、こういうような御意見をいただけるんだ  
ということを初めて体験しまして、一つ一つすばらしい御意見をいた  
だいたなど、そちらにも感謝をしています。

こんなにたくさんの意見が日頃から出ているのか、それともこうし  
た教育に関して非常に関心が高いのかということの比較はできません  
が、本当に多くの御意見をいただいたなという印象を持ちました。

さて、そういう中で、毎回、私は企業の立場で参加しておりますの  
で、静岡県は、手前みそですけれども、弊社をはじめ産業が非常に発  
達している県だというものは誇らしいことだと思っており、そういつ  
たところを生かした教育を含めていただけないかと申し上げてきまし  
たが、それが先ほど村山先生もおっしゃっていましたが、非常に  
意識的にかなりたくさん入れてくださったのかなということでお礼  
申し上げます。そこがまず、これを一通り拝見したときの強い印象で  
す。

それから、後段でお話ししようと思っていたので、少し重なる話に  
なりますが、今先生方の働き方というところにも触れていたもので、そ  
れについても感じたところを申し上げますと、今まで先生方の勤務時  
間、例えば8時間が標準だったのに対して10時間とか12時間とかやっ  
ていると。だから、それで働き方で、まずは8時間の勤務にしましょ  
うと。これはやっぱり働き方を見直す大きな目的になるわけですが、  
それとはまたちょっと別に、働き方で、例えば先ほど寺島先生がおっ  
しゃっていたように、採点などで時間が大分楽になった分を一体何に  
使いたいかということ。先生方が本来やりたいことというのはこうい  
うことで、でもほかにいろいろなことに忙殺されていてできないとい  
うようなことになっているので、私たちがやりたいことというのは何  
なのかというところ、こういったところがもう少し触れられると、働  
き方改革を推進していく当事者である先生方のモチベーションがもう  
少し明確になっていくのかなというような気がしました。そこがこれ  
からのポイントで、まさに次のところでお話になるところだと思うの  
ですけれども、そんなような印象を受けました。以上です。

村山委員長： ありがとうございます。

どうしても教育委員会の方針なので、教育委員会の視点になってく  
るので、先生方視点がちょっと確かにない部分があると思うのですけ  
れども、その辺りはこの後の来年度以降の具現化の中で追求していく  
こととして、私が追求するわけではありませんが、追求していただい  
ければなと思います。

では、副委員長からもお願いいたします。

永田副委員長： 全体を通して、まず問題定義をきっちり明確にして、それを解決するためにどのような役割があって、どういう解決策があるのかというふうに具体的に述べられているものとしてまとまったところは非常に良かったと思っています。

ただ、具体的にといっても、ICTの活用であれ、探究的な学習であれ、地域との連携であれ、今後どのように具体的に進めていくとよいのかがまだはっきりしていませんので、パブリックコメントでもありましたように、だからといって具体的にどうしてよいか分からないという御意見もあったところも納得のいくところですよ。ただ、そこまで具体的に提示しなくても、これから実際にやってみて、幾つかのところの事例が共有されていけばよいのかなと思っています。

あるところでは、こんなふうにICTを活用してみてこういう問題があったよと、だから次こういうふうに解決したよとか、あるところでは地域とこんな連携をしたよというところが、それぞれの学校で閉ざされることなく、外に発信されて、複数のところで共有されていく、そういったところがあればきっと共有できて、よりよいものが仕上がっていくのかなと思うのですけれども、共有の方法というのがまだ分からないところがあるので、それをぜひICTを活用して、教師間、それから学校間で共有できるような環境が整備されていくといいなと思っています。

私は、藤枝市の教育委員会をしていて、ICTの活用を推進していく中で、まずはエクセルのシートに各先生がICTをどんな教科で、どんな単元で、どんなふうに活用したかを書き込んで、どういう問題があったのかも書き込んで、それを先生たちの間で共有してくださいということを行いました。それで、一つの学校の中で共有されていくと、そういう使い方もあるのだなということによって共有が始まって、今度はそれを別の小学校と共有をしてみても、藤枝市の中で共有をしてみてくださいということをしたところ、教材もその部分を使わせて欲しいという先生が出てきたりとか、使い方として探究型学習でこういうICTの活用があるよということを提示して、それなら私もやってみようという先生がいたりとか、そういうやり方でどんどんよいものができていくといいなと思いますので、ICTの活用って授業の中での活用だけではないものですから、そのように先生たち、学校の知識の共有の場という形で提供できたらと思っています。

村山委員長： ありがとうございます。

具体的な部分に関しては、また第2部のほうでいろいろと御意見いただければと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

この基本計画自体の中身の話については、これが基本的には最後の話し合いになると思いますので、もし何か残しているものがありましたらお願いします。

そうしましたら、この後2、3と進んでいきますけれども、そこでまたいろいろ気が付いたことがあれば、御意見いただきたいと思っています。

最初にも言いましたけど、長期計画を策定してから5年後の状況変化を踏まえた計画変更という意味では、現状をきちんと捉えた方針になっているのではないかと考えておりますので、これでぜひ進めたいと思っています。いろいろ御議論ありがとうございました。

そうしましたら、取りあえずこれで計画自体は無事通ればという話ですけど、こういう計画で静岡県としては進んでいくことになりませんが、これを実際に具体的にどのように進めていくかということについては、これまであまり我々としても、それが役目ではないので、議論をしてこなかったわけですけど、こういうことを考えたのであれば、もっとこういうことをやったらいいよねといった具体的なアイデアについて、取りあえずまとまった形でなくても構いませんので、来年度以降の教育委員会の取組のために、ヒントになるようなことをいろいろ上げていただければと思っています。これについては、オブザーバーの皆様からも御意見ありましたらいただきたいと思っています。

まずは、私から一つお話ししたいこととして、地域の産業と高校との連携を進めていくためには、それなりの仕組みが必要だと思いますが、県の総合会議に出たときに、これは企業系のほうの御提案だったように思いますが、地域ごとにいろいろな企業が集まってイノベーションをやるようなセンターみたいなのをつくりたいという提案がありました。もしそういったものができたら、そういうところに学校、高校生もぜひ入れるような場所をつくってもらえるとありがたいと思っています。

個々の高校で、そういう相手先を探して活動していくことはすごく大変なので、ここに行けばそういう窓口があるよという場所があるととても助かります。そういう形を企業さんのほうの団体と連携して、企業のための組織、センターだとしても、そこに学校を入れていただけるような窓口をつくっていただけるとありがたいと思っています。ですので、教育委員会でもぜひ他の部局とそういう形で連携していただけるとありがたいと思っています。

あと、何でも結構ですので、アイデアがあれば、この後どんどん委員会で膨らめていただけるとと思いますので、小さな御意見でもありましたらよろしく願いいたします。

田中オブザーバー： すみません、N T T西日本の田中です。

村山委員長： よろしく願いいたします。

田中オブザーバー： 先ほどお話しいただきましたとおり、探究的な学びを充実させるためには、地域や産業界との連携というのは必須になるかと考えておりました。資料4の29ページの脚注に追記いただいた「マイスター・ハイスクール事業」のような取組というのは拡大すべきと思っております。

さらに、私たちNTT西日本も一般社団法人シヅクリの探究プログラムの活動を通じて、県内の幾つかの学校と関係を持って、協働学習や探究学習の支援を行っております。このような活動は、基本計画にも記載があるとおり、高等学校在学中に県内産業や地元企業に関する知識や理解を深めるキャリア教育に貢献できるものと捉えまして、もっとNTT西日本静岡支店としても活動量を増やしていきたいと考えておりますし、教育委員会の皆様とも連携させていただければと思っております。以上です。

村山委員長： ありがとうございます。

今のお話にもありましたが、いろいろな高校、あるいはいろいろな企業さんのほうで連携していろんな取組を始めていらっしゃると思いますが、なかなかそういう話がいろいろなところでうまく聞こえてこないというか、普及していないという部分がありますので、そういった情報のハブみたいなのところも、教育委員会のほうで何か音頭を取ってつくっていただけるとありがたいと思います。

先ほどのAIを使った採点の話とか、そういうのもうまく伝わっていけば、具体的にどんなものがあるのというふうな形で、それぞれの学校が動けるような形で情報があれば、もう少しそれぞれの学校で取組できると思いますので、ぜひそういったことも考えていただけるとありがたいと思います。

ほかはいかがでしょうか。

三輪委員： 探究的な学びについてですが、先日リクルートさんが出しているキャリアガイダンスという雑誌の編集長さんの話を伺って、この探究の学びのすばらしさについていろいろ話をしてくれました。高校によって物すごくうまくやれているところと、一応何かやっているところと、そのギャップが非常に大きいということで、そこら辺は一つの高校に任せるよりも、県のほうで何かこんな感じでというようなものがないと、本当に学校間の差がすごく出てきてしまうと思いますので、ぜひ県の皆さんに頑張ってくださいたいと思いました。以上です。

村山委員長： ありがとうございます。

その学校間の格差という観点からいうと、今回のここでもいろいろ



と書かれています。やはり小規模校の子どもたちの学びの機会をいかに確保するかというのは考えていかなければいけないので、そういう意味では当然地元の産業ももちろん大事にしなければいけません。地元では触れることができないようないろいろなことについても、それこそネットワークみたいなものを通じて子どもたちが学べるような環境ができていったらありがたいなと思います。

お願いします。

寺島委員： 総合教育センターに、探究的な学びに関する専門的なコーディネーター経験を持って、そして各学校の教員に本当に丁寧にサポートして下さる方がいらっしゃいます。静岡市立高校で、探究チームの中心としてやってくださった方が本校の定期訪問にも来てくださりまして、いろいろなサポートをしてくださっています。そういった方がいることで、今探究活動に対してドライブがよりかかっているというようなことでありがたいなと思っております。

ただ、もう少し人数がいてくれればと思っております。そのチームをサポートしなければいけない対象が全校で、特に専門高校ですとか、総合学科の場合には既に今までも企業さんと、それから地域と連携を深めているとは思いますが、3分の2を占める普通科というのは、なかなかそのネットワークを今までつくってこれなかったということがあると思います。そこに今本当に限られた人数で対応してくださっているものですから、ここを今後進めていただいて、既にリーダー人材はあすなろにいますので、さらにそこをサポートして下さる方を増やしていただければと思っております。さらにSSHである清水東高校、それから浜松工業に対してのサポートで、コーディネーターの役割の方を今後教育委員会に座っていただいて、さらにサポートいただけるというようにお話を伺っていますが、SSH以外の普通科の探究というようなところは本当にボリュームが大きいですし、それから生徒たちもすごく多様で、どうしていいのかわからないということがありますので、教育委員会の皆さんにぜひお願いをしたいなと思います。

村山委員長： ありがとうございます。

池上教育長： 委員長、発言をよろしいでしょうか。

村山委員長： どうぞ。

池上教育長： 建設的な御提案を数々いただいてありがとうございます。いずれも私自身考えていること、感じていることと響き合う内容でした。

まず、探究のノウハウがかなり学校によって違うというのは、私ど

もも感じておりました、少しでもその平準化というか、レベルアップというか、横展開を可能にするために、今年度既にオンラインの探究プラットフォームというのを立ち上げました。まだ立ち上げて一月、二月经つか経たないかなので、コンテンツが充実しているとはまだまだ言えないと思いますけれども、様々な学校の取組の事例や、あとは先生方がやってみて、実はこんなところでうまくいかなかったというような体験談等も含めて、県下で共有できるようなオンラインの仕組みを今立ち上げたところです。恐らくその内容が、コンテンツが充実していくことによって、今御指摘のあったようなバランスの悪さというのが改善されていくんだらうなと感じております。

もう一つ、情報のハブについてです。まず、今立ち上がっているそのオンラインプラットフォームにお話のあったような情報のハブの情報がまさにくっついていくと、そこを経由して入っていけるかなと思っております。

それともう一つ、これはもう少し先になります。2027年度の半ば以降になるかと思いますが、新しい図書館が東静岡にできます。そこに、ふじのくに地域・大学コンソーシアムの事務局が入ります。それは何を意味するかというと、これまで実質的な事務所機能しかなかった地域・大学コンソが図書館の中に空間を持つことになります。さらに、そこは高校生、大学生にとっても使いやすい場所になってきますので、私はそれでいろいろな場所で、今年度、図書館及びコンソーシアムが、言わば先ほどの言葉で言うと情報のハブになって、高校生や大学生、あるいは行政と企業をつないでいくような役割を果たしていくといいのかなと思っています。

具体的に動き出すのは、恐らくまだもう少し先、この基本計画の終わりぐらいになると思いますが、様々なところで出てきている企業と高校生との連携をとということを少しプッシュしていく仕組みであるオンラインプラットフォームと、これから2027年度を目途に整備していくコンソーシアムと図書館が担っていく連携機能、これをしっかりと各方面にアピールしていくということが重要であろうと、今お話を聞いて考えていました。以上です。

村山委員長： ありがとうございます。

その話の流れでいうと、金谷につくられる、「ふじのくに国際高等学校」の探究の話と、それから国際バカロレアの話というのも、やはりそういった形のいろんな県の取組の一環というふうな形で捉えてよろしいですか。

池上教育長： はい。

村山委員長： ありがとうございます。

そういう意味では、計画自体、あるいはその一部はもう動いているということなので、ぜひ進めていただきたいと同時に、もしそれに、もっとこういうことも足したらよいのではないかという御意見がありましたら、お願いいたします。

寺 島 委 員： よろしいですか。

村 山 委 員 長： どうぞ。

寺 島 委 員： 先々週の話ですが、伊豆の稲取に行ってきました。それで組織が改編されて静岡大学の地域創造学環の方たちが伊豆でいろいろな活動をされている、そののところに参加させてもらうために行きまわりました。まさに伊豆の生徒数が少ない学校に対しての、ちょっと年上のお兄さん、お姉さん方のサポートが入って高校生たちが学びをいろいろ深めることができているし、さらに中学生まで巻き込んで、稲取高校と稲取中学校のプラスバンドの活動をアートで表現している様子などを見せていただきました。

同じような取組が静岡県立大学さんとか、それから静岡文化芸術大学さんでやっていらっしゃる、そういったところに、今、各学校が連携しながらやっております、静岡大学の地域創造学環が改組されてしまって、これからどうなるのかなど不安なのですが、これからは村山先生の教育学部をお願いして、いろいろやっていかなければいけないかなとも思っておりますので、そういった情報をたまたまつかんでいるものはチャンスがいろいろあるのですけれども、もっとそういった情報を横展開しなければいけないということをお話を込めて紹介しようと思ひまして、今お話しさせていただきました。

村 山 委 員 長： ありがとうございます。

静岡大学としても、県東部への関与が少し弱いこともありまして、特定の部局で、伊豆地区で高校の探究のコンクールみたいなこともやらせていただいています。今度3月9日に発表会がありますが、そういうような形で静岡大学としてもできる限りいろいろ協力していきたいということと、地域創造学環は、一応、改組して拡大強化してグローバル共創科学部というものになったということですので、これまでどおり基本的には地域への関わりというのを大事にしていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

そういうような形で、例えば探究のコンクールをやりましょという話になったら、ぜひいろいろな学校で参加していただけると、どんどんそういう交流ができていくのではないかなと思いますので、お互い少しずつ力を出しながらやっていけたらいいなと思っています。大学の話で申し訳ありません。

ほかにも何かありましたら、よろしく願いいたします。

川 口 委 員： 今、地域とも連携というお話が盛り上がっていますが、個々の高校レベルになったときに、うちの学校にとっての地域ってエリア的にもどこまでを大体想定するのだろうかとか、よく高校の先生は、小・中だったら通学区があるから大体それをイメージできるけど、高校の場合の地域との連携、協働とか、いっぱい地域、地域と言われるけれど、一体地域というのは何なのかといったようなことを私はよく耳にします。

ある先生方とお話をしていたときに、「うちの学校にとっての地域というのは何だろうね」、「地域資源というのは何だろうな」というところから議論したらどうですか、そういうことをされたことないのですかと私が聞いたら、その先生方はないと。ほとんどの教員は、教室の中で自分の担当教科を教えるのにいっぱいいっぴいで、地域など思いをはせたこともない。だから、エリア的にもなかなか想定できないし、エリアを想定したときに何があるかまで普段から全く気にもかけていない。

多分、こういう先生方は結構いると思うので、現場で寺島先生は、どういうふうにそういう意識関与などされているのかなど、それこそ具体的な取組をお伺いしたいところですが、やはり先生方のそういう意識レベルというのをどうやってこれから変えていくとか、感化させていくかというのも、また同時に考えていかないと、こんな仕組みがありますといっても、なかなか自分事にならない、腹に落ちてこないと思うので、その辺りも重要ななと思います。

村 山 委 員 長： ありがとうございます。

例えば熱海高校のビジネス観光類型であれば、地元といえば熱海と違って割と分かりやすさがありますが、特に先ほどもお話がありましたけど、3分の2ある普通科の場合は、なかなか自分たちの地元が何かというのがよく分からないところもあるわけです。ただ、県のほうの取組で、高校が幾つかのそれぞれの学校のスタイルを追求する形で、例えばグローバルみたいな形で地域と連携しながら教育を進めていくという取組をやっているところもあると思いますので、そういったところは、自分たちの学校にとって地域というのは何だと考えていらっしゃると思うので、そういったところからいろいろなところに、普通科全体に展開していくとありがたいなと思います。

寺 島 委 員： 清水東高校が、遅ればせながら令和6年度からコミュニティ・スクール、それでやろうと考えておりました、まさにそこで、清水東高校にとってのコミュニティって何だろうねということが、今、そちらに移行しようと思っている管理職の悩みの種になっております。先日の

最後の学校評議委員会でもコミュニティってどういうものみたいなお話をされたのですが、少し格好付けて言うと、静岡県全体が清水東高校にとってのコミュニティと言い張るしかないかな。浜松から伊東まで生徒が来ております。それから、転居の関係で県外からも来ている生徒もおりますので、静岡県全体の中で清水東高校はコミュニティという概念を考えています。そうすると、今回のこの在り方に関する基本計画の資料の中にいろいろ書いていただいていることが、そのまま清水東高校においては資料として使えるという、またありがたいものを今日頂きまして本当に感謝したいと思っています。

全県と言っておきながら、でもその中で、どこを取り上げていくのかというようなところを考えていくことが、これからまさに清水東高校の教員にとって考えなければいけないことですし、探究活動をやっていく普通科の6クラスの生徒たちの考えていかなければいけないことだという、そういう認識を今もう一度持ちました。ありがとうございます。

村山委員長： ありがとうございます。

そういったことも、またこれからの取組の中でやっていっていただければと思います。

ほかはいかがでしょうか。

永田副委員長： 先ほど、基本計画を実際に実行するに当たって、ポイントは、これからは共有だということ述べたらば、早速、オンラインプラットフォームを構築されて共有していく方向に向かっているということを伺って大変うれしく思いました。

具体的には、探究プラットフォームとおっしゃってございましたけれども、探究的な学び以外にも、どれぐらいの内容が共有できるのか。それから、誰がアクセスできて、どの間で共有できるのかということをお伺いしたいです。

私としては、地域連携事業であったりとか、ICTの活用であったりとか、各高校の取組、悩みも全て共有できたほうがよいと思っていますので、もう少し具体的に教えていただけたら幸いです。

事務局： 私からでよろしいでしょうか。

探究プラットフォームにつきましては、基本的に県立高校の教員がメインの対象ですが、小・中学校の先生や私立の先生も当然アクセスできますし、探究関係者のNPOさんとか、そういった方々にもアクセスして情報を書き込んだりするようなことができます。ですから、基本的に探究に関わるような方は幅広くアクセスできるような仕組みになっております。

今のところ探究に関するトピックが中心ですので、その探究におけ

る学習例などの共有であるとか、いろいろなイベントの共有、例えば外につながるとしたときに、そのつながる方々の活動内容の紹介であるとか、そういった探究に係る情報が載っています。

あと、1つ補足で、探究プラットフォーム以外にも実はそういった場というのはありまして、以前に研修管理システムというのを県で構築しましたが、その中に、例えば授業で使っているような教材の実践例を貼り付けるなど、模範授業の画像を貼り付けて、それを参考にしてくださいというような取組も先行してやっているところがありますので、そういった分野ごとにいろいろなデータベースがありますけれども、そういったものを総合的に統合して共有していくことを今後進めていきたいと思っております。

永田副委員長：     ありがとうございます。

幅広にアクセスできるということを伺って、そこは安心しましたが、共有のカテゴリーが探究的な学びというところが中心だったものですから、もう少し幅広に基本計画で重要視しているところも、これから共有できたらいいなと思います。

あと、共有の次は知識の再利用と言われていまして、共有した後に、それをどのように利用して自分事として使っていくか、その再利用のさせ方の仕組みというところも、システム上でもうまく仕掛けをつくらないと、ただ聞いただけで終わってしまうものですから、その辺もぜひ工夫していただけたらと思います。

村山委員長：     ありがとうございます。

あとは、例えば探究学習の最後は大体まとめて発表するという部分が結構あるかと思いますが、そういったものを共有できるようなことも考えていただけるとありがたいなと思います。

今のお話ですと高校生自身がアクセスするところがないので、そういうふうな形でやっていただくと、例えばいろいろなところで商店街の活性化のようなことに取り組んでいても、よその地域ではどんなことをやっているのかなというのを見て参考にすると、また新しいアイデアが出てくるということもありますし、よその地域の商店街と、うちの地域の商店街は一体どこが違うんだろうかというようなことを考えて次のステップに進むというようなこととか、いろいろ可能性はあると思いますので、そういう場所があったら、高校生が探究を考えていく上でもいろいろ参考になるのではないかなと思っています。

事務局：     今の先生のお話に少し補足させていただきます。

高校生ももちろん見られます。様々な取組を貼るページもありますので、オンリーワン・ハイスクールでやっている様々な事例などを今貼り付けて共有しているところでもありますけど、基本的にはまだ貼り

付いているというような状況ですので、それを利用してどういうふう  
にやっていくかということについては、まだ今後の課題だと思いま  
す。そういった活用の仕方についてもこれから考えていきたいと思  
います。ありがとうございました。

村山委員長：     ありがとうございます。  
                  そうですね、オンリーワン・ハイスクールですね。ありがとうござ  
いました。  
                  ほかはいかがですか。

河合委員：     皆さんの話と重なるところもありますが、ぜひ来年度以降、含めて  
いただきたいということで思いをお伝えさせていただきます。

1つは、先ほど来出ている先生方の働き方改革です。これは企業も  
全く同じなのですが、働き方改革を進めていく途中は、一旦仕事が増  
えるという過程が必ずあると思います。新しいことを取り入れて、  
それに置き換えていくという作業をしていかなければいけないので、  
先生方はいろいろな新しいことをやりながら、でも今までやっていた  
ことも続けながらという並行時期だと思います。

なので、本来たどり着くところは働き方改革なのだけど、その途上  
はもしかしたら今まで以上に仕事が増えてしまっているというような  
ことだと思うので、そこを解消できる具体的な手だてをきちんと計画  
の中に織り込まないと、働き方改革の呼び声だけがなくて、実際には  
現場は疲弊しているという状況になってしまうということは容易に想  
像できると思うので、ぜひその具体的手だてを計画の中に盛り込ん  
で、きちんと向き合っていただきたいというのが1つです。

それからもう一つが、企業も一生懸命、企業の魅力をアピールして  
県内に残っていただけるような働きかけというのをしてきましたし、  
これからもしていきたいと思っています。それが先ほど川口先生に褒  
めていただいた高校卒業後の生徒は非常に県内企業に勤める比率が高  
いということで、よい結果を得られているのかなと思います。ひと  
たび進学者に目を向けると、他県への進学が非常に多いということが  
このグラフから読み取れます。

ずっと静岡にいてほしい、静岡の高校に行って、静岡の大学に行っ  
て、静岡の企業に勤めることが必ずしもよいわけではありませんが、  
一つの道筋として、そういうふうな道筋もあってもいいのかなという  
ことを考えると、永田先生や村山先生がここに参加をされているの  
で、ぜひ大学のほうに、先ほどもお話が出ましたけれども、頑張っ  
ていただいて静岡の大学の魅力をもっともっと伝えていってほしいな  
と思います。それで静岡全体で盛り上げていくというような活動ができ  
るといいなと、そういうことが計画の中に織り込まれていてほしいな  
と思いました。以上です。

村山委員長： ありがとうございます。  
みんな頑張らなければいけないということで、頑張ります。  
オブザーバーの皆さんからもうかがえますか。  
井ノ上委員、お願いします。

井ノ上オブザーバー： 今日はありがとうございました。  
まず、資料についてですが、資料3は今後取り組むべき事項等も非常に整理されて、物すごい仕事量だったのだろうなとびっくりしています。また、分かりやすく整理されていたものなので、とても感謝しております。ありがとうございました。

それから、川口先生がおっしゃった19ページです。案の19ページにグラフが載っていて、言われてみれば静岡県というのは働く場所がとてもたくさんあってありがたい県だなと改めて感じました。ネガティブに切り出していくのではなくて、ポジティブに文章を書かれた、でも今こんなふうになっていますよというふうに書かれたほうがよいのかなと感じました。県外の大学等に行く生徒はたくさんいますが、だけど静岡県には働く場所がとてもたくさんある、ほかの県に比べても決して見劣りすることがないというような話を書いた後で、でも今はねという、そういう流れのほうがよいのかもしれないと感じました。

それから、3つ目です。15ページに多様な背景を持つ生徒に寄り添う高等学校というのを、パブリックコメントの対応として学びのセーフティーネットという記載を増やしていただいて、まさにこれは私が令和4年度に委員をさせていただいたときに一番言いたかったことです。これが記載されて、とてもありがたく感じました。ありがとうございます。

それから、情報ですけれども、コミュニティ・スクールというお話も出ました。NPOの中間支援をしているセンターが公設公営とか公設民営、浜松NPOネットワークセンター、私が属しているところは民設民営なのですけれども、そういうところには地域資源の情報がいっぱいあります。静岡県については、ふじのくにNPO活動支援センターというのがありますので、そこと連携をしていただくと、いろいろな情報、社会貢献活動しているNPOはもちろんそうですけれども、若者たちと一緒に連携してやろうという機運が今とても高くなっているのです、ぜひそういうところを利用していただければと思います。ありがとうございます。

村山委員長： ありがとうございます。  
割と子どもたちに関しては学校がという形の計画に、もちろん高等学校の在り方に関する議論なのでそうなのですが、子どもたちについてまた別な情報を持っている外の組織もいっぱいありますので、そう



いったところとの連携、今後考えていかなければいけないのかなという非常にいい御示唆をいただいたと思います。

ほかはよろしいでしょうか。

中村オブザーバー： すみません、よろしいでしょうか。

村山委員長： 中村先生、よろしく申し上げます。

中村オブザーバー： 静岡大学、中村です。

いろいろパブリックコメントを踏まえて全体を整理されて非常にバランスの取れたものになっていて、作成された皆さんの御苦労がしのばれるなと思いながら伺っておりました。

これまで議論になっていたところ以外で少し言及させていただきますと、新しい取組を探究的な学びも含めて進めていくということで先生方の御負担が増えるといった話題がありましたけれども、他方でこれまで地道に取り組まれていた先生方の取組も大切にすることがあるのかなと感じています。特に、新しく目立つような取組以外に、地道に普段から取り組まれている先生方の取組の中でグッドプラクティスというか、すばらしい取組もこれまでたくさんあったのではないかと思います。

今、教員養成に関わる静岡大学教育学部に所属していますが、学生たちが先生になりたいと思うときに、新しい取組をどんどんしていきたいという思いもある一方で、地道にこれまでお世話になった先生方の影響で、そういった先生になりたいなということになっていく学生たちも非常に多くて、そういう意味では県としてアピールに、もしかしたら新しいことではないので、そんなにならないかもしれない部分も、実は教員の魅力という部分に関わっているのかなということをごへ来て感じる機会が増えております。

その意味で、変えていかなければいけない部分はたくさんあると思いますが、大切にしたい、これまでやってこられた先生方の取組の中でぜひ県のほうでも取り上げていただいて、既に取り上げていただいているとは思いますが、ぜひそういった地道な取組も県内で周知いただくと、少し教員養成の魅力も強化されるのではないかなと感じました。

もう一つ、探究ということではコーディネーターの拡大というような話題も出ましたけれども、確かに探究を一緒にやりませんかというようなお話が幾つか来たりして、各学校がかなり御苦労されているのだなというところもあります。ここは、やはり大学と高校が連携していくとともに、実際、地域に関わっていらっしゃる方も加わりながら、三者、四者、五者という形で関わる人材が多様であることが恐らく大切なのかなと思いますので、そうした多様な人が入ってこられる

ような仕組みをぜひ実現していただければありがたいなと思います。

地域のコーディネーターの方、多分何人か県内で活躍されている方がいらっしゃると思いますが、見ている限り、かなり業務量も多そうに感じています。つまり、少ないコーディネーターの方に仕事が集中していて、もっとやりたい学校があるのにということ、なかなかそこに手が回らないというようなこともあるかなと思うので、そういった部分を補完できるような仕組みが何らかの形で整備されるといいのかなと思います。

特に探究というのは、子どもにとっても、先生、教員にとっても、新しくいろいろなことにチャレンジできるという意味では魅力になり得るところだと思いますし、そういった意味では今回のテーマである誰一人取り残さないという目標に、多様な生徒や多様な地域の人たちが関わりながら協働的に学んでいく非常に一番据わりのよいところだと思いますので、そういった部分に少し資源を割いていただけると、今後5年間、より充実した形になるのかなと感じました。以上です。

村山委員長： ありがとうございます。

確かに教育学部でいうと、教員になりたくて教育学部に來る学生の多くは、今の学校を経験して教員になりたいと思って來た学生なので、そういう意味では今の学校のよさというのも当然あるので、やはりそれも大事にしなければいけないなと思いました。ありがとうございます。

そうしましたら、いろいろ御意見をいただきましたけれども、最後に、本計画の策定に向けて昨年度の在り方検討委員会やプロジェクトチーム、それから本年度の策定委員会等々で、いろいろな方々に参加していただいて御意見をいただきました。これまでを振り返って御感想やコメント、高校生へのエールなどありましたら、最後に1人ずつコメントをいただきたいと思います。

まずは、会場の委員の方からいただいて、それからオブザーバーの皆様からもコメントをいただきたいと思っています。

そうしましたら、また寺島委員からよろしいでしょうか。

寺島委員： 分かりました。

昨年度の在り方検討委員会のプロジェクトチームから参加させていただきました。今年度はこの基本計画の策定というところでまた参加させていただきました。本当に多くの方の御意見を聞く機会がありまして、それから学校でやっているものというのを一度客観的に考えてみたときにどういう意味があるんだろうか、それから何が足りないんだろうか、どう変えていったらいいんだろうかと、私自身が考える本当によい機会になりました。

そこをさらに一般化して発信するということが自分自身できただろ

うか、この会に何か貢献できただろうかというところに関しては反省することばかりで本当に申し訳ないなという気持ちに今なっておりますが、学びのよい機会を与えていただき、それが今までいろいろなところで出会った方をもっと大事にしなければいけないなとか、これからその方たちをまたどこかでつなげるのが自分の仕事なのではないかななどと考えております。本当にありがとうございました。

村山委員長： では、三輪委員、お願いします。

三輪委員： 本当にこのようなすばらしい委員会に、私も参加させていただきまして、いろいろ勉強になりました。

コロナ禍以降、世の中でICTとか、そういったものが加速的に動いてきて、弊社でも今ちょうど過渡期で、インボイスとか、電帳法とかそういった関係もあって、会社、経理をやっている人間の2倍の人を割いてやらないと世の中についていけないとか、そんな状況なので、教育もこうしたデジタル化の波に対して、古い先生からすると苦痛以外何物でもなくて多分地獄だと思います。こういうことをやりたいと思っても、デジタルツールを使いこなせない人たちというのは多々いらっしゃると思います。だから、学校もすごく先生たちは忙しいと思いますが、これからの静岡県を担ってもらう高校生に、よりよい未来になっていくような教育をしていただきたいと思います。

あと、最近感じているのが、心の問題といいますか、強さとか、そういったものなども、Z世代の子たちというか、最初、渡された携帯がスマホの子たちの扱いという、何となくメンタル的な何かとか、そこら辺がちょっと違うのかなとすごく感じているものですから、そこら辺で心の教育というか、そういったものをやってほしいなと保護者としては思っております。ありがとうございました。

村山委員長： 川口委員、お願いします。

川口委員： 2年間、大変お世話になりました。私は委員の活動もですが、昨年度においてはプロジェクトチームの委員もやらせていただきました。フルで関わらせていただきました。唯一の静岡県外者で、最初、アウエー感満載で私は耐えられるんだろうかと昨年度の初回のときに感じたのですが、委員の皆様、オブザーバーの皆様、そして教育委員会事務局の皆様が本当に温かく迎えてくださって、いつも今度は来るのが楽しみに、参加するのが楽しみになって、この間過ごしてまいりました。

私自身もいろいろなことを考える学びの機会を頂戴できて、本当に感謝申し上げます。まさかこんな50ページにも及ぶ計画ができることは、昨年度の初回のときに思ってもみませんでした。出来上がった、

これから御承認とかいただいで、この計画が動いていくわけですがけれども、この後もやはり大事だと思います。教育委員会の方に何かむち打つようなことをこれから言いますけれども、この計画がきちんと進んでいるのかどうか、ざっくり言うと、高校教育、変わっていつているのかどうかというチェック、モニターが必要だと思います。いわゆる評価です。この評価の仕組みをまたどうやってやっていくのかというのが、次の宿題といえますか、考えていかないといけないことなのかなと思っております。

実は私、鳥取県のほうで高等学校の第三者評価委員というのを5年ほどやった経験があって、今はその第三者評価というのが、残念ながら県教委が事業をやめてしまっていて取り組まれてはいないのでけれども、県立高校が3年に一遍、第三者評価を受けるというものでした。鳥取県は県立高校が24校しかなくて、3年に一遍、単年度で見ると8校が第三者評価の対象校になるので、8掛ける3、3年かけて24校が全て評価を受けるというのを2サイクルやったところでその事業は終わってしまっていて、私はその2サイクルの途中からでしたが関わっていました。

高等学校って専門性も高いせいか、どうしても閉鎖的な部分が小・中に比べて何か雰囲気としてもあります。やはり外部の目とかが必要だと思います。なので、今回のこのできた計画が、これからちゃんと進んでいるのか、先生方のいろいろな取組がちゃんと変容しているのかどうか。当然今までやっていることを否定するわけではありませんが、そういう今度モニタリングをどうするかということを一方で考えていかないと、こんなによい計画ができて大変もったいないので、今後はそういう評価の仕組みなども考えていく必要があるのかなと感じております。

いろいろな比較も私なりにできたので、今回学ばせていただいたことをまた鳥取のほうに戻って、様々な形で還元できたらいいなと思っております。

昨日、あるところから夜景を見まして、静岡の夜景、きれいだな、結構立派じゃないかと思いました。でも、こんな夜景が成り立っているのも、やはりそれだけまだ人がいるし、いろいろな産業が活発だから、ああやって電気がついていっているわけですし、かなり遅い時間まで静岡駅、本当に明るくて、新幹線も在来線もいっぱい、23時を過ぎても通っていて。地方はどんどん今、減便とか終電繰上げとか本当に真っ暗になる、夜が早いですし、そもそもそんな夜景が成り立たないような地方が今出てきているわけで、静岡でも、今後何もしなかったらば、もしかしたらそんなふうなことになってしまうかもしれないわけです。

だから、いかにこの夜景を守っていくかではありませんが、これからその夜景を守るのは高校生や、これからの人たちだと思っています。

す。以上です。

村山委員長： ありがとうございます。  
では、河合委員、お願いします。

河合委員： ありがとうございました。  
皆さんおっしゃっていましたように、私も同じ思いですけれども、貴重な機会をいただきまして本当にありがとうございました。  
言いたいことを言ったものですから、きっと取りまとめてくださった村山先生、リードが本当にすばらしかったので、いろいろな意見を上手に吸い上げていただいたと思うのですけれども、それからそれをこういうような対策にまとめてくださった事務局の皆さんに改めてお礼を申し上げたいと思います。

別の機会に池上先生とお話をしたときに、人を育むというようなことにおいては、こういうような皆様とも企業とも通ずるところがあって、みんなで人を育てていくというようなことはとても大事なことで、まさに共通テーマではないかというようなお話をさせていただいたことがありました。そういう点でこういうような皆様方とこの議論ができたということは、本当にすばらしいことだと思っています。

会社で若い人たちと会話をすると、物すごく将来に向けた不安感を持っています。これはその一例でしかありませんが、年金の問題で、私たちがうかうかしていて、大きな会社に入ったからとのんきにしていると、将来非常に不安だと。だから、いつまでも勉強もしていかなければいけないし、本当にこのキャリアでいいのかということもいつも心配しているというようなことを話しているわけです。

それは日本の仕組みが少しひずみを起こしているということによるいろいろな不安感だと思いますが、そういうふうに若い人たちの元気がなくなったり不安になったりするというようなことは、大人がきちんと解消していったらあげないといけないな。だから、何か決められた道筋で進んでいくだけではなくて、少し遠回りしても、あるいは何か別の道を歩んでも元気で活躍できるというような仕組みをつくってあげないと、子どもたちは不安で前に進むのがいっぱいいっぱいになってしまうので、ぜひそういうような世の中をつくらなければいけない、そういうことの一つの足がかりに今回の議論も結びついていくことではないかなと思っています。そういう意味で、すばらしいことがここにはたくさん盛り込まれていると思っています。

なので、皆さんおっしゃっていたように、これがどういうふうに、書いただけではなくて実現できていくのかということが本当にこれから大事になってくると思うので、事務局の皆さんにお願いすると同時に、私自身がどういうふうにそれにも関わっていけるのかということを考えていきたいなと思っています。本当に多くの学びをありがとう

ございました。

それから、これは全然この会とは別のお願いになりますが、これまで高校を卒業して企業に就職する人は、学校内の推薦のような仕組みによって、そこで例えばヤマハ発動機から求人が1枠出ていると、学校内の選考があって、その人が1人、就職試験に臨みますという、こういう仕組みがあって、これはとてもよい仕組みでもあったのですが、残念ながら学校の選考に漏れてしまった人でも、非常に情熱を持って、例えば私どものヤマハ発動機に来たいなと思ってきている人も少なからずいると思っていて、何かそういうところでもう少し自由度の高い仕組みに少しずつ変わっていくといいなと思っています。

そうすることによって、私たちも広くいろいろな人たちに会社の目指していることであるとかをお伝えして、魅力的な企業でありたいと思うモチベーションが湧くので、ぜひ、そこである意味ふり落とすことなく、職業選択が広くできるような、そんな仕組みにいつか発展していくということを期待したいなと思っています。

この会の在り方とはまたちょっと違う話でしたけれども、お伝えさせていただきます。

村山委員長：       ありがとうございます。  
                          そうしたら、永田副委員長、お願いします。

永田副委員長：     大変貴重な機会を与えていただきまして、ありがとうございます。  
                          た。

日頃は小・中学生の教育委員として高校へ送り出す側、それから大学教員として高校生を受け入れる側という立場で実践してきたわけですが、今回、高等学校の教育の在り方ということを議論させていただいて大変勉強になりました。

これから実践していくに当たって、高校の生徒、それから先生も共に、なぜこれを学ぶのかということをしつこく意識しながら実践して行ってほしいなと願います。探究的な学びをぜひしてねということを示唆しましたが、そのバックグラウンドとしては、これからのSociety5.0で、これまで人間がAIを動かしていたのに対して、AIが最適提案を人間にしてくると。そのときに私たち人間は問題を解決する能力というのが求められていると。情報を活用した問題解決能力、これを身につける実学教育として探究的な学びが必要だよと。さらに、その題材としては地域連携が重要だよ。そういったことを分かった上で実践すると、何のために学ぶかが意識できて、その学びがとても楽しくて、うれしくて、やりがいがあって、世の中の仕組みが分かっていることを実感できると思いますので、その根本となる目的と意義ということをしつこく意識しながら、これから実践してほしいなと願っております。ありがとうございました。

村山委員長： ありがとうございます。  
そうしましたら、今度はオブザーバーの方からも一言いただきたい  
と思います。  
まず、常葉大学の堀井様、お願いします。

堀井オブザーバー： 御無沙汰しております。常葉大学の堀井です。  
私は2016年の第3次長期計画の策定委員会、2020年からの池上先生  
とも御一緒しました才徳兼備の人づくり小委員会、それから昨年度の  
県立高校の在り方検討委員会のプロジェクトチームにそれぞれ関わら  
せていただきました。いろいろな意見が出てきたものをコンパクトに  
まとめていただいて、本当にありがとうございました。素晴らしい基本計  
画になったと思います。

私自身は、これまで何度か話しましたが、生まれも育ちも静  
岡県藤枝市ですが、東京、富山、それから山梨へ行って、ずっと回っ  
てきて、やっと10年前に常葉大学にお世話になって久しぶりに家から  
通えるようになりました。あっちこっち住みながら先生方と勉強をさ  
せていただく中で、よく言われたのは、静岡は豊かで暖かくてよいと  
ころですと。中には退職後は静岡に住みたいですということのように、皆さ  
んに静岡ですと言うとそのように言っていただいて、そうなんだな  
と。それが静岡に帰ってきてから、あちこちを回りながら、本当に豊  
かで暖かくてよいところだと思っていましたが、1年目に来た段階で  
人口流出が北海道に続いてワースト2だったのです。非常に驚きまし  
た。

今日、コミュニティ・スクールとか地域の問題がいろいろ出ていた  
と思いますが、今、長くコミュニティ・スクール導入の専門委員をや  
らせていただいて、コミュニティ・スクールって学校運営とか人事に  
意見を言えるということかというと、ミニ教育委員会というのでしょ  
うか、学区単位のミニ教育委員会というガバナンス改革の視点はある  
と思います。ただ、今日委員会の中で出ていましたけれども、高校でい  
うと地域が非常に広いとか、ガバナンス改革までいってないとか、な  
かなか思うようにいってないところはあると思いますが、前提になる  
のは、やはり静岡って本当に豊かでよいところだということ、ある  
意味で当たり前だに思っていたのかなという。例えば、東京だと自然体  
験ができないということ、それに合わせてあちこち行くとか、結構経営  
の方針の中に入っていたと思います。でもやはり静岡は当たり前豊  
かさを持っていて、そののころに対してきちっと向き合えなかった  
という部分があるのかなと思うのです。

ある意味では学校運営協議会というのは、地域の人とかを入れて、  
この学校、校区のよさをもう一度実感するということに意味がある  
と思います。文科省では努力義務ではなくてコミュニティ・スクール

は必置というように考えているということを聞きます。

今のコミュニティ・スクールは、地域学校協働本部と一体的導入というところに意味があります。学校の先生方に今までできなかった部分を地域の力を入れてどういうように考えていくのか、社会に開かれた教育課程とかいろいろ言われています。なかなか思うようにまだ動いていませんけれども、コミュニティ・スクールを積極的に活用するというのは意味があるのではないかと思っています。

10年前にイギリスに調査に行って、今年、久しぶりにイギリスの学校理事会に調査に行く予定です。10年前に行ったときには、ビジネスモデルと我々は呼んでいましたが、いわゆる企業の方が積極的にその中に入ってきていました。

日本の公教育の今までのよかったものをもしかしたら壊す危険性もあるかもしれませんが、積極的にそういう地域のいろいろな資源を活用しながら、寺島先生がおっしゃったように静岡県全体が地域という捉え方もできるわけで、この学校の特徴を踏まえて地域のビジネス的なものもどんどん入れながら学校をもっと充実していただければと思います。

学校の10の力を12にするためにコミュニティ・スクールが関わればいいなと思います。本当にありがとうございました。

村山委員長：       ありがとうございました。  
                          静岡大学の中村美智太郎先生、お願いします。

中村オブザーバー：    ありがとうございます。基本計画のオブザーバーとして関わらせていただきまして非常に多くの学びがありました。心より感謝申し上げます。

あくまでもこれは計画ということで、これからいかに実行に移していくかということが課題だと思いますが、PDCAでいうと、まさに最初のPをつくった状態だと思います。もう一つ、これを実行に移していくプロセスで大切なのは、恐らく状況に応じて柔軟にこのプランを変更することではないかなとも思います。計画をつくった段階で、こういうことを申し上げるのはちょっと気が引けますが、5年間の間に恐らく我々が想定する以上のことが起こるような時代趨勢でもありますので、新しい状況が起きてきたら、躊躇なくそれらを取り入れ、これまでの計画の中で時代に合わなくなってきた部分は変えていくといった柔軟な体制が必要なのかなと感じております。

この計画を実現に移していくに当たり、もう一つ大切なのは恐らく自律性ではないかなと思います。つまり、自分で律すると書いて「自律性」ですが、学校の先生方が一人一人、この計画の趣旨を理解して、日々の教育活動の中で何ができるかをそれぞれの先生方が考えていった上で、静岡県全体の教育が新しい方向に向かっていくというよ



うな形が望ましいので、高校の先生方とお話しする機会は何回もありますが、皆さん非常に優秀で、それぞれ日々の学校現場で感じている疑問や新しい教育の方向性などをそれぞれの先生方が考えていらっしゃる印象を持っております。計画の趣旨を理解して自分たちの学校に持ち帰って、そしてそれらを踏まえて自分たちの教育をより魅力あるものとして発信できるような環境づくりを、ぜひ県教委としてもサポートいただければと感じております。

最後になりますが、非常に長大な計画、魅力的で変えるところがないのではないかなと今思っております。御作成してくださった皆様に重ねて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

村山委員長：       ありがとうございました。  
                          N T T西日本の田中様、お願いします。

田中オブザーバー：   N T T西日本の田中です。  
                          私はI C Tに特化したオブザーバーということで、短い期間ではありますが、貴重な経験をさせていただきましてありがとうございました。

                          これからの世の中は、資料4の14ページにもありましたとおり、デジタル技術が目まぐるしく発展して将来の予測が難しい社会になっていきますし、その中で新たな価値を生み出す創造力を育むということについては、与えられたI C T機器やソフトウェア、またC h a t G P Tをはじめとする生成A Iなどをとことん使ってみて効率化して生産性を上げていくということはもちろんですが、それがどのようにできているのか仕組みを考えたり、それらを組み合わせを試みたりといったことが新たな発想を生む、また創造力を生むといったところにつながっていくと思います。

                          企業としても、単に偏差値が高い人材よりも、自分の頭で考え抜ける人材とか、いわゆる地頭力がある人材というものを欲しているというのが実態ですので、高校生や教員の皆様には、そういったところも意識していただければと思っています。

                          また、情報があふれた社会においては、フィルターバブル現象というものに御注意いただく必要が非常にあると思います。フィルターバブル現象とは何かといいますと、皆さんもスマホやパソコンでネットニュースを御覧になると思いますが、アプリケーションが自分の趣味・嗜好を判断して、だんだん自分が得たい情報しか表示をしなくなってしまうという現象です。逆に言えば、自分とは違う意見とか情報が見えなくなってしまうので、非常に視野が狭くなって危険だといえます。これは多くのページを閲覧させたいという広告ビジネスが背景にあるので仕方がないというところもありますが、実際には身の回りで当たりまえのように起こっています。

これを避けるにはどうするのかといいますと、アナログな方法ですけども、新聞を読むというのが一つの方法ですし、私も実践しています。デジタル一辺倒ではなくて、アナログのよさを取り入れるという一例ですが、これからのICTのリテラシー教育の一つとして、親から子へ、また先生から生徒へとしっかりと伝えていかないといけないと感じています。

私からは以上です。短い期間でしたが、ありがとうございました。

村山委員長：     ありがとうございました。

最後に浜松NPOネットワークセンターの井ノ上様、お願いします。

井ノ上オブザーバー：     ありがとうございます。令和4年度の見直しの委員会から関わらせていただきまして、こういう機会を与えていただいたことに感謝しています。

浜松NPOネットワークセンターは、先ほど申しましたけれども、中間支援ではありますが、多様な人々の社会参加を進める事業も同時に行っておりまして、今回、12月からアンケート調査を浜松市内の定時制や通信制の高校の御協力を得て、約450人の子どもたちに居場所に関わるアンケートに答えていただきました。最後の「あなたは大事にされていると感じますか」という質問に対して、ちょっと大人としてはぎくっとするような回答がありまして、これは活動をもっと丁寧にしていかなければいけないと思った次第です。

そして、社会の在り方として、子どもたちが客体から主体にという、そういう流れがあります。今回も生徒の視点として、探究学習など主体性を育む学びの実践というものが主な視点として上げられたことについて、本当にこういう流れになっていると思いますが、教育の世界では例えば個別指導計画とか、そういう言葉が、福祉の世界では指導とは使わないで支援計画というような言葉が当たり前になっています。リードとかガイドではなくてアシストするという、そういう発想で子どもたちと付き合っていくとか、私たちNPOもそういう活動の趣旨をちゃんと踏まえて子どもたちと付き合っていかなければいけないということは、最近非常に学んでいるところです。

そういう意味でも、今回まさに教育の場面で、その流れをこういう基本計画の中に盛り込んでいかれるのを見て、とても心強く思いました。いろいろありがとうございました。

村山委員長：     ありがとうございました。

これで、一応一段落、計画は終わりで、これから実行に移っていくわけですけども、トライ・アンド・エラーで恐れなくて進んでいてほしいなと思います。エラーは怖い怖いのですが、何もない中か

ら手探りでいろいろなことをやっていくときってすごく楽しくて、またそこで学びもあるものですから。ただ、大事なことは、そこに参加している人たちがみんな主体であるということで、我々が主体で、例えば学校はその対象だとか、あるいは高校生がその対象だというふうになってしまうと、トライ・アンド・エラーが子どもたちにとってはあまりよい学びにならないと思いますので、みんなが主体として参加するような形で、この計画の実現に取り組んでいただければなと思っています。

そうしましたら予定の時間が参りましたので、ここで終了とさせていただきます。

ほかの委員の方やオブザーバーの意見を聞いて、またいろいろ考えたこと、言い尽くせなかったことがありましたら、事務局にメール等でお知らせいただければと思います。

本日、いろいろいただいた御意見を最終的にもう一回、事務局でまとめて提出版をつくりたいと思いますけれども、それに関しては事務局と私のほうに御一任いただきたいと思います。

それでは、事務局に司会をお返しします。よろしく申し上げます。

事務局： 皆様、長期間にわたり熱心な御協議をいただき、誠にありがとうございました。

以上をもちまして、令和5年度県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会の全協議を終了いたします。皆様、本当にありがとうございました。